第39回くるめの考古資料展

筑後川と弥生時代のくるめ

ちくごがわ　やよいじだい

川流れ、人交わる。

2014.10.18（土）～11.14（金）

会場：久留米市埋蔵文化財センター

主催：久留米市　久留米市教育委員会

ごあいさつ

久留米市は、九州一の大河筑後川と、筑紫平野の豊かな水と緑に囲まれ、恵まれた自然環境のもとで発展を遂げてきました。先人の残した貴重な遺産は今も私たちの足元に数多く存在しています。

今回の考古資料展は「筑後川と弥生時代のくるめ　川流れ、人交わる。」と題し、弥生時代の久留米の集落が、筑後川や有明海を利用して、他地域との交流を活発に行いながら発展していく様子を、出土品をもとにご説明いたします。

先人たちが築きあげた歴史や文化を紐解き、地域の歴史を知ることで、久留米の魅力を再発見して頂ければ幸いです。

末文になりましたが、展示会を開催するにあたりご協力いただきました多くの関係機関、関係者の皆様に深く感謝の意を表します。

平成26年10月18日

久留米市長　楢原利則

出展遺跡一覧

遺跡名	所在地	概要
久保遺跡	城島町楢津	朝鮮系の土器や木製品などが見つかっています。
玉満松木ソノ遺跡	三潴町玉満	弥生時代終末期の住居や大きな井戸が見つかっています。
高三潴遺跡	三潴町高三潴	大きな溝の一部が見つかり、その中から小銅鐸が見つかっています。
塚崎東畑遺跡	三潴町高三潴	甕棺の中から骨や石の鏃が刺さった人骨が見つかっています。
道蔵遺跡	大善寺町中津	拠点集落と考えられ、集落を囲む溝から鳥形土製品や青銅製品が見つかっています。
塚畑遺跡	安武町安武本	前期～後期の集落が見つかっています。
一ノ左右遺跡	荒木町下荒木	石棺の内部からガラスの玉が多数見つかっています。
東櫛原今寺遺跡	東櫛原町	前期の竪穴住居が見つかっています。市指定史跡。
石丸遺跡	東櫛原町	多くの甕棺が見つかり、中から武器の破片が出てくるものもありました。
西屋敷遺跡	合川町	多くの甕棺が列状に埋められていました。
市ノ上東屋敷遺跡	合川町	弥生時代の竪穴住居や、古墳時代初頭の有力者の家の跡などが見つかっています。
古宮・大林遺跡	合川町	弥生時代後期の集落で、多くの住居や鉄製品などが見つかっています。
ヘボノ木遺跡	東合川三丁目	楽浪系の土器や銅鏡などが見つかっています。
新府遺跡	東合川八丁目	小銅鐸の鋳型が見つかっています。
安国寺甕棺墓群	山川神代一丁目	多数の甕棺や、お祭りに使用した土器が見つかっています。国指定史跡。
仁王丸遺跡	北野町仁王丸	中期の建物や、朝鮮系の土器が見つかっています。
良積遺跡	北野町赤司	環濠集落内から鉄器、玉、大量の土器が見つかっています。
木塚遺跡	善導寺町木塚	前期のお墓から小壺が見つかっています。
水分遺跡	田主丸町常盤	環濠集落内の住居から大量の朱や、その原料の辰砂が見つかっています。
石垣宮原遺跡	田主丸町石垣	甕棺の内部から人骨が見つかっています。

くるめの弥生時代年表

年代	時期区分 弥生時代	できごと				
		倭（日本）とくるめ	朝鮮半島		中国	
B.C.500ごろ	早期	北部九州に弥生文化が渡来する	多くの人々が倭（わ）に移民する	青銅器時代	鉄器の普及など様々な技術革新	戦国時代
B.C.400	前期	久留米に弥生文化が普及する				
		・東櫛原今寺遺跡				
		・良積遺跡				
B.C.300		さらなる渡来人（とらいじん）が久留米にやってくる				
B.C.200	中期	・久保遺跡（朝鮮系土器出土）	燕（えん）（中国）の衛満（えいまん）が衛氏（えいし）朝鮮を建国	初期鉄器時代	秦（しん）による中国統一	秦
		・仁王丸遺跡（朝鮮系土器出土）			武帝（ぶてい）による領土拡大	漢
		集落間の争いが激化。甕棺墓（かめかんぼ）が増加。				
		・石丸遺跡（甕棺墓地）				
B.C.100			前漢の武帝が楽浪郡（らくろうぐん）を設置（現平壌（ピョンヤン）市内）			
		倭奴国王、漢に金印を賜（たまわ）る			初めて東方の情報を得る	
		青銅器の普及				
		・安国寺甕棺墓群（国指定史跡）		三韓時代		
0	後期	鉄器の普及。交易の活発化。	弁辰（べんしん）で鉄生産			新
A.D.100		・高三潴遺跡（小銅鐸出土）				後漢
		・ヘボノ木遺跡（楽浪系土器出土）				
A.D.200		倭国乱れる	公孫氏（こうそんし）が帯方郡（たいほうぐん）を設置して実効支配する			三国時代
A.D.250	終末期	卑弥呼（ひみこ）が魏（ぎ）に朝貢（ちょうこう）し、金印を賜（たまわ）る			『魏志（ぎし）』倭人伝が書かれる	
		拠点集落の発達				
		・古宮遺跡（鉄鋤先（すきさき）出土）				
		・道蔵遺跡（三韓土器出土）				
		・水分遺跡（環濠集落）				
		・良積遺跡（環濠集落）	高句麗（こうくり）が楽浪郡（らくろうぐん）を滅ぼす			

本展示会にご協力いただいた機関（50音順、敬称略）

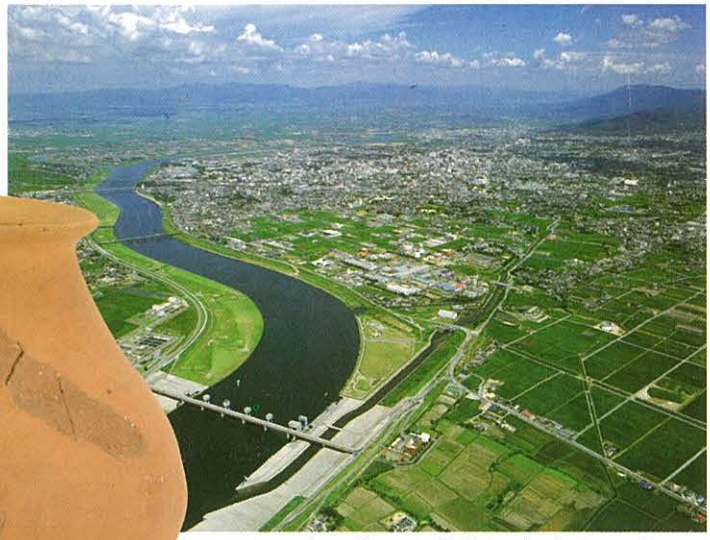
朝倉市教育委員会　小郡市教育委員会　香川県埋蔵文化財センター　九州歴史資料館　基山町教育委員会　熊本県教育委員会　佐賀県教育委員会　筑前町教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター　日田市教育委員会　福岡県教育委員会　山鹿市教育委員会　八女市教育委員会

凡例

1. 本文中の章題の※印がついたサブタイトルは、『三国志』「魏書」東夷伝倭人条、いわゆる「魏志倭人伝」の文章からの抜粋です。
2. 年表の年代観については、1996年以降の考古学的年代観によるものであり、2003年発表の国立歴史民族博物館によるAMSc14年代観は採用していない。

第一章　弥生時代のはじまり

～帯方東南大海の中に倭人あり※～



有明海から筑後川をさかのぼって
弥生文化が流入した。

稲作と共にもたらされた弥生前期の土器
貯蔵用の容器である壷が増える。
【木塚遺跡】善導寺町木塚

大陸系磨製石器　伐採用の斧や、
木材加工の新技術が伝来した。【良積遺跡】北野町赤司

九州一の大河「筑後川」

筑後川は阿蘇外輪山を源流とし、筑紫平野を経て有明海にそそぐ九州最大の河川です。その流域は、熊本県、大分県、福岡県、佐賀県の４県にまたがり、200を超える支流が集い、周辺に住む人々にとって欠かせない水源となっています。筑後川は有明海の潮の満ち引きの影響を大きく受けるため、遡る潮の流れに乗って、有明海からの船の出入りがしやすく、筑紫平野における水上交通の大動脈として古くから活用されてきました。

弥生時代の始まり

大陸や朝鮮半島からの移民によって、北部九州に新たな文化がもたらされました。外来の石器には、きれいに磨き上げられた鋭い石器が多く、木材の伐採や、加工に威力を発揮しました。また、稲作が伝えられ、生産力が向上し、人々の住む場所や、生活のスタイルが変化しました。また、渡来した移民は、元いた地方の方法で墓をつくるため、支石墓などの新しい墓制や風習も北部九州にもたらされました。

豆ちしき

※帯方東南大海の中に倭人あり：現在の朝鮮民主主義人民共和国の南西部に、漢民族の植民地である帯方郡という郡があり、そこから南東の方向の海の中に倭人が住んでいる、という意味。2000年以上前、すでに中国でも日本列島の地理が知られていた。「倭」の字には、未開で背が低い人々という意味がある。

第二章　渡来人と倭人社会の成長

～倭国乱れ、相攻伐すること歴年※～

弥生中期の朝鮮半島系土器
【久保遺跡】城島町楢津

甕棺の中から出土した磨製石剣と矢尻
【石丸遺跡】東櫛原町

甕棺に埋葬された人骨
【石垣宮原遺跡】田主丸町石垣

弥生時代の前期から中期にかけて、渡来人が続々と北部九州にやってきます。城島町の久保遺跡や北野町の仁王丸遺跡からは、朝鮮系の土器が出土しており、北部九州と朝鮮半島に活発な往来があったことがわかります。

新しい技術や文化が次々と導入され、倭人の社会は飛躍的に発展していきます。農業生産が拡大し、集落の人口が増えると、新たな集落をつくり、次第にムラの数も増えていきました。また、農耕社会特有の耕地や水利をめぐる村争いも生まれ、大陸から伝来した石の武器などが使用されました。塚崎東畑遺跡では、体内に鏃が残った人骨が甕棺の中から発見され、石丸遺跡では、戦いに使用した石剣が多く見つかっています。

また、このころに北部九州では、他の地域にはほとんど見られない甕棺墓という独特のスタイルのお墓が広まります。大きな甕型の土器をお棺に使用したお墓で、久留米でも数百基が見つかっています。

豆ちしき

※倭国乱れ、相攻伐すること歴年：卑弥呼が女王として共立される前の倭国は、70～80年も国々が互いに争っていた、という意味。ただし、考古学上の成果を見れば、戦いの痕跡が多く確認されるのは中期の前半（塚崎東畑遺跡や石丸遺跡の時代）であり、卑弥呼が共立される70～80年前の時代（後期後半）ではない。

第三章　筑紫平野の拠点集落

～今、使訳通ずる所三十国なり※～

弥生時代後期から終末期の筑紫平野の拠点集落
平野の中に、5～10㎞の間隔で、集落が共存している。

弥生時代も後期になると、各地に大規模な集落が現れます。これらの多くは、溝で囲まれた環濠集落と呼ばれるもので、佐賀県の吉野ヶ里遺跡はその代表例です。これらは一般的な集落よりもはるかに大きく、金属器や、ガラス製品などの貴重品が多く出土します。このような集落を拠点集落と呼びます。筑後川やその支流沿岸にこのような集落が営まれており、朝倉市の平塚川添遺跡や、日田市の小迫辻原遺跡、久留米市の道蔵遺跡、古宮遺跡、良積遺跡、水分遺跡などは、ほぼ等間隔に立地しています。これらの拠点集落は、筑後川がもたらす豊かな水を利用した稲作や、地域間の交易を通じて発展していきました。

豆ちしき

※今、使訳通ずる所三十国なり：倭人の国々のなかで、通訳を介して言葉が通じる国は、三十ほどある、という意味。対馬國から女王國（邪馬台国）までの国々を指し、中国からの外交が可能な範囲と見られる。それより遠い地域の倭人と区別している。筑紫平野は、所在地が確定している奴国から30㎞ほどしか離れておらず、地理的にはこの外交可能な範囲に含まれていると考えられる。

第四章　地域間の交易

～國國に市有り、有無を交易す※～

交易の証し「土器」

豊前系の高坏
【水分遺跡】田主丸町常盤

朝鮮系の無文土器
【道蔵遺跡】大善寺町中津

近畿系の壷
【良積遺跡】北野町赤司

肥後系のジョッキ形土器
【水分遺跡】田主丸町常盤

弥生土器は、地域によって形や文様に様々な特徴があり、同じ土器を使う人々は、同じ文化を共有し、日常的に交流している人々ということが言えます。久留米の拠点集落からは、それ以外の地域（近畿、瀬戸内、大分、熊本地方、朝鮮半島）の特徴を持つ土器が出土しており、当時かなり広い範囲で活発な交易があったことがわかります。

土器自体が、交易品として取引されたケースは少ないと考えられており、物を入れた器として運ばれたか、土器を作る人がやってきたと考えられます。

豆ちしき

※國國に市有り、有無を交易す：倭人のクニには、それぞれ市があり、互いに持っているものと持っていないものを交換している、という意味。この時代に集落同士の交易ネットワークがあったことを示している。

技術革新「鉄器」

三角状鉄片（鉄の切りくず）
【水分遺跡】田主丸町常盤

豊富な種類の鉄製品【良積遺跡】北野町赤司

弥生時代後期の拠点集落は、地域の外交や生産の拠点でもありました。朝鮮半島から鉄の素材や、鉄製品を輸入して、加工し、周辺の集落に分け与えていました。北部九州の遺跡は、全国的に見ても、圧倒的な量の鉄製品を持っており、それぞれの拠点集落が、半島との交易を背景として、相当な経済力を有していたと考えられます。北野町の良積遺跡では、朝鮮半島南部のものと思われる有肩袋状鉄斧（1）や、鉄素材としての意味を持つ板状鉄斧、そのほか鉄刀子（2）、鉄鎌（3）、のみ（4）、ヤリガンナ（5）、鋤先（6）など豊富な種類の鉄製品が出土しています。また、田主丸町の水分遺跡では、三角状鉄片と呼ばれる鉄の切りくずが大量に出土している住居などもあり、輸入した鉄を加工していたことが分かっています。

権力の象徴「青銅器」

鏡の鋳型
【寺徳遺跡】田主丸町地徳

朝鮮半島系の鏡
【良積遺跡】北野町赤司

青銅器は銅と錫と鉛を混ぜて作られます。作られた時は金色に輝いていますが、時が経つにつれて青色に変化していきます。当時、輝きを放つ青銅器はとても珍しく、武器だけでなく、祭器としても使用されました。良積遺跡では、甕棺の中から中国で作られた鏡が出土しています。

青銅器は初め、大陸・朝鮮半島から輸入されていましたが、次第に日本でも生産されるようになりました。特に筑紫平野では多くの鋳型が出土していることから、玄界灘方面だけでなく、有明海側からも青銅器生産の技術が伝播していった可能性も指摘されています。久留米市では、寺徳遺跡や新府遺跡から青銅器の鋳型が出土しています。

倭の特産品「玉」

上：管玉　下：勾玉
【良積遺跡】北野町赤司

ガラス玉
【一ノ左右遺跡】荒木町下荒木

玉には勾玉、管玉、丸玉、小玉、棗玉などの種類があります。首飾りや腕輪として使用されていて、持つ人の権力を表していたのでしょう。玉の多くはヒスイや碧玉、メノウ、水晶、滑石などの石で作られたものです。産地が限られているものが多く、ヒスイは新潟県にある糸魚川が原産地として有名です。遠い地方から運ばれ、神秘的な緑色をもつヒスイや、重厚な緑色をなす碧玉製品などは、大変貴重なものとして珍重されていました。

石製以外には、ガラス製のものがあります。ガラス製品は大陸から運ばれてくる貴重なものでしたが、次第に国内での生産が可能となりました。ガラス製品には数ミリにも満たない小さいものもあり、その製作技術に驚かされます。久留米市内では、良積遺跡や水分遺跡から多くの玉類が出土している他、一ノ左右遺跡ではお墓の中からガラス製の小玉が大量に出土しています。

神秘の赤「赤色顔料」

赤色顔料を塗るための鉢
【水分遺跡】田主丸町常盤

甕棺の中の管玉

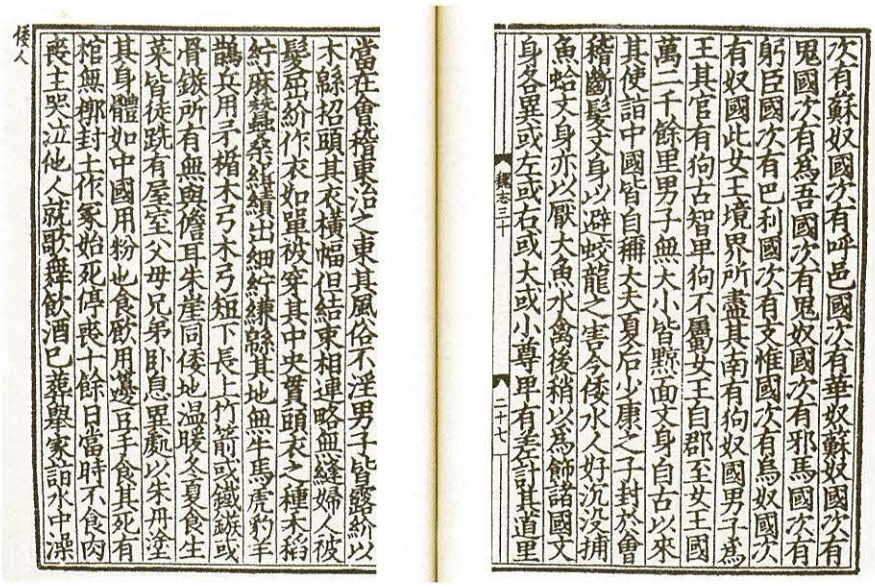
ベンガラが塗られた甕棺
【良積遺跡】北野町赤司

赤色顔料は、鉱物を原料とした赤い顔料で、朱（水銀朱）とベンガラ（酸化第二鉄）の二種類があります。弥生時代には「赤」はよこしまなものを遠ざける色として、お墓や、土器に塗られていました。多くの場合は、墓地など日常生活の場ではない場所で出土しますが、水分遺跡では、集落内の住居の中から赤色顔料が出土しています。その住居からは、甕を縦方向に割り、顔料を塗る道具として使ったと思われる土器も出土しています。同様の土器が瀬戸内や北部九州の各地で出土しており、赤色顔料の交流や加工、分配などが活発におこなわれていたことが分かります。

『魏志』倭人伝と出土品

鉄製の鏃
【良積遺跡】北野町赤司

骨製の鏃
【水分遺跡】田主丸町常盤



『魏志』倭人伝原文（百衲本）：岩波文庫『新訂 魏志倭人伝 他三篇 中国正史日本伝（1）』より転載
当時の中国と日本の政治関係だけでなく、倭の風俗や気候、植生などについて詳しく書かれている。

3世紀に書かれた中国の文献『魏志』倭人伝では、倭人（当時の日本人）の生活様式や、風俗、産物について詳しく書かれています。倭人の道具について、倭人伝では**武器は、矛、盾、弓を用い、矢じりには、鉄や骨を用いる。**と書かれていますが、実際に久留米市内の遺跡でもそれらの遺物が出土しています。**中国で白粉を塗るのと同じように、倭では赤い顔料を身体に塗る。**とか、**山から丹（赤色顔料）が産出する**とあり、水分遺跡の住居跡からは、先に述べたように多くの赤色顔料や、それを塗るための鉢などが出土しています。**真珠や、青い玉が産出する**とも書かれています。青い玉は遺跡から出土する勾玉や管玉のことと考えられ、倭の交易品の主要なものとして中国の皇帝にも献上されていることも記されています。**国ごとに市があり交易をしている。**という記事は、まさに、多くの産物を活発に交易する、筑紫平野の拠点集落の姿を表しているとも考えられます。

半島や大陸から渡来した、弥生時代の新しい文物が急速に広がるための豊かな土壌を持つ筑紫平野は、弥生時代の後期には、拠点集落がひしめき合う、人口密集地帯になっていたと考えられます。平野の中を5キロから10キロ程度の間隔、またはもっと狭い間隔で、質、量ともに豊富な物質文化を持った拠点集落が存在し、それぞれが緊密な連携を持ち、時には争いながらも共存していたと考えられます。また、それらの集落では、山陰や、瀬戸内、近畿地方などの遠方の遺物が出土し、西日本全体のネットワークも機能していたことを示しています。さらには、現在のような国境がない時代ですから、朝鮮半島とも日常的に交流しており、他地域には見られない膨大な量の鉄製品が、筑紫平野の拠点集落からは出土しています。

集落同士を結ぶ道として、さらには、半島や西日本の各地域とを結ぶ道として、有明海や、筑後川とその支流が果たした役割は大きいと考えられます。久留米も、この例に漏れることなく、市内にはこの時代の重要な遺跡がいくつもあります。道蔵遺跡や、古宮遺跡、良積遺跡、水分遺跡などは、まさにその拠点集落であり、それらを中心としたクニが存在した可能性があります。

田主丸町水分遺跡：低台地の先端に造られた環濠集落
（緑線は低台地の範囲、水色線は環濠）

城島町久保遺跡：朝鮮系の土器が出土。背後に流れる筑後川。

水分遺跡の大型竪穴住居（一辺 10m）

西日本の交易地図（弥生時代後期）

内面朱付着土器（水分遺跡）

第 39 回　くるめの考古資料展
『筑後川と弥生時代のくるめ　川流れ、人交わる。』
久留米市埋蔵文化財センター
発行　久留米市
平成 26 年 10 月 18 日

久留米市 市民文化部 文化財保護課　TEL0942-30-9225　FAX0942-30-9715